

作曲家

藤倉 大

藤倉 大 Dai Fujikura

1977年大阪生まれ。5歳よりピアノを始め、15歳で英国に留学。トリニティ・カレッジ・オブ・ミュージックでダリル・ランズウィックに、修士課程をロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックでエドウィン・ロックスバラに、博士課程をキングス・カレッジでジョージ・ベンジャミンに師事した。1998年、ポーランドのセロツキ国際作曲コンクールで最年少優勝。2003年武満徹作曲賞第2位、04年英ロイヤル・フィルハーモニック作曲賞、05年国際ウィーン作曲賞、07年ドイツのパウル・ヒンデミット賞、08年ギガ・ヘルツ賞の特別賞、09年尾高賞、芥川作曲賞受賞。シカゴ交響楽団、BBC交響楽団など世界各地のオーケストラやアンサンブルから作曲を委嘱。最近ではイギリスのシンガーソングライター、デヴィッド・シルヴィアンとのコラボレーションも行った。

www.daifujikura.com

Cosmopolitans

212

われら地球人

「自分で書いたものなら、好きなように演奏できるから」と、幼い頃から作曲りを始めた。15歳で単身イギリスに渡り、作曲に専念してきた日々。今や、世界各地の音楽祭やオーケストラからの作曲依頼が相次ぎ、現代を代表する作曲家ピエール・ブーレーズに「最も才能がある一人」と言わしめる。

平井英理子＝文
Text by Eriko Hirai

萩原美寛＝撮影
Photo by Yoshihiro Hagiwara



藤倉の作曲ノート。音符を数字に置き換えるなど、その手法は時に数学的だ。

今 年一月、シカゴ交響楽団の本拠地、シンフォニーセンターのステージに、一人の日本人が大きな拍手に迎えられて上がった。彼の名前は藤倉大、世界初演となった『Mirrors』の作者である。

『Mirrors』とは鏡、六人のチェロ奏者が弾く和音は、最初はピチカート（弦を指で弾く奏法）で弾き、すぐに反転した和音を弓で弾く。ピチカートの音は最初は強く、しだいに小さくなるが、弓で弾いた時にはしだいに大きく鳴らす。音の強弱は、和音と和音の間にまるで鏡を置いたように対称になるのだ。

さらに、六人のチェロ奏者がそれぞれ異なる和音を弾いている時には、互いの和音が波打つ湖面に光が当たって煌めいているように、不規則ながらも魅了される音色となつて、聴衆は鏡の世界の中を漂う。

作曲を依頼された時、ブーレーズからはただ「私を驚かせてくれ」と言われたという。その一言は、大きな期待を寄せていることの証でもある。

実際にブーレーズは「彼は、若い作曲家の中でも、最も才能がある一人だ」と藤倉を高く評価する。世界的な作曲家から、最も才能がある作曲家の一人、と評された藤倉の才能とはどのようなものか、彼の経歴から探ってみる。

藤倉がピアノを始めたのは五歳の時だ。小学生の頃にはレッスン曲を楽譜通りに弾くことに納得がいかず、自分なりにアレンジして弾いて、先生から叱られたという。中学時代には、合唱コンクールの伴奏を担当し、その合間に流行りの曲をアレンジして弾いては、仲間から大いに受けたそうだ。当

これまで何度も仕事をしてきて関係の深い、ロンドンシンフォニエッタの本拠地、ロンドンのキングスプレイスにて。

現代音楽の演奏にあたっては、作曲家自らがリハーサルに立ち会い、指揮者や演奏者たちに曲の表現方法を伝えていく。各地のオーケストラから委嘱を受ける藤倉は、常に世界中を飛び回る。



速いピチカート、揺らぎを表す弦の表現など、現代音楽の演奏には高度なテクニックが必要となる。

時の部活動は、陸上部。部員数が最も多くて、一人ぐらい抜けてもわからないから、というのが入部の理由だ。走るの、部活に出ないでピアノの練習のために帰宅する時だけ。この頃には本格的に作曲を始めていて、作曲のための時間をどれだけ取れるかが、藤倉にとっての最優先事項だった。

中学卒業と同時に、音楽で奨学金を得て（授業料二五％減額）、イギリスに留学する。ドイツ留学も考えたが、英語圏でまず語学を身につけてから、との考えで英国に決めた。

ちのデパートの場所に最適で、藤倉は音楽室の鍵を上級生に貸すことで、さまざまな便宜を図ってもらった。ピアノは、高校の定期コンサートで演奏するだけでなく、理学会のデイナーの席でも演奏し、次年度の運営資金獲得に貢献することもあった。

トリニティ・カレッジ・オブ・ミュージックに進んだ藤倉は、一年の時から上級生のために作品を作っていたという。トリニティの卒業試験は、器楽科の場合は卒業演奏で判定されるのだが、演奏曲に現代音楽も一曲必要なのだ。その作品を藤倉は書いていた。逆に作曲科の卒業試験は、楽譜だけでなく、実際に演奏されなければならない。

交渉のセンスをもって

Natural negotiator

「曲を書いてくれないかと頼まれた時に、引き受ける基準は、異なる楽器であること。いろんな楽器のために曲を作るのは、すごい経験になりますし、いずれ自分の卒業演奏の時には、演奏してくれる人が必要になるから、曲を書いてあげると、僕の卒業演奏の時には協力してくれるよね、と頼んでおけますから。これは、勉強になりました。楽器の特性を知ると、技術的に何が可能なのかを知ることがある」

藤倉の卒業作品は、三〇分の大作だった。学内で演奏するのが普通だが、藤倉は外のホールを借り、前代未聞の有料コンサートにした。審査員の三人の教授たちもチケットを買って聴きにきてくれた。コンサートは二夜とも満員、教授たちも「面白かった、来てよかったよ」と、言ってくれたという。つまり、卒業試験もコンサートの興行も大成功。

「この経験で、やればできる、という自信ができました。コンサートオーガナイズする面白さも知ったし、自分の作品が演奏されるのを聴くこともできたし、良かったですね。実は、三年の時にオーケ

(上) 藤倉の作品『Atom』の楽譜。小節ごとに拍子が変わる。(中) 理想の森を表現したという『secret forest』では雨の音が入る。慣れない器具に、演奏者も最初は戸惑い気味だ。ロンドンシンフォニエッタのリハーサルにて。(下) 昨年の11月、東京の明治学院大学で藤倉の講演会とコンサートが開かれた。



「secret forest」で大きな役割を果たすバスーン奏者とも、本番前に念入りな打ち合わせを行う。





世界有数のオーケストラであるシカゴ交響楽団。本拠地シンフォニーセンターのホールは、華やかな雰囲気包まれている。



今年1月、シカゴ交響楽団で初演された「Mirrors」。

Cosmopolitans 212 Dai Fujikura

To compose is to be performed

作品が演奏されること

ストラの曲を書いて、演奏してもらえませんか？と学長に頼んだんです。交渉事はトップから攻めないと話が早く決まらないじゃないですか。ちょうど、セロツキ賞を取った後だったから、『ではやりましょう』と、学生のオーケストラに演奏してもらうことになりました。実際にオーケストラが演奏するのを聴くことは、作曲家にとって非常に大事なことです」

大学院は、二つの音楽大学から奨学金のオファーがきた。一つは学費の五〇％カット、もう一つは七〇％カット。ここで藤倉の交渉能力が炸裂する。

五〇％カットの大学に、「もう一つの大学は七〇％カットと言ってくるのだが」と伝えると、「君が我が校の音楽賞を取ったら学費免除にしよう」と言ってきた。「明日、もう一つの大学に返事をする事になった」と、焦燥感を煽ると、翌日、その学長から電話がかかってきた。「おめでとう、君は音楽賞を受賞したので、学費免除で我が大学院に迎えたい」

セロツキ賞の受賞後、武満徹作曲賞第二位、ロイヤル・フィルハーモニック作曲賞、国際ウィーン作曲賞と、作曲賞を次々と受賞する。二〇〇九年には、尾高賞と芥川作曲賞のダブル受賞を果たす。

輝かしい受賞の数々、だが、藤

ら、作曲だけに専念できますから」作曲する時間を作り出すために働く。作曲だけが自分の人生。藤倉の人生の目的は、実に明快だ。

アマチュアの作曲家と、プロの作曲家の違いは、作曲を委嘱されるかどうかだろう。藤倉の目標は、賞を取るのではなく、プロの作曲家として認められることだ。それは、委嘱を受けること、そして

自分の作品が必ず演奏されることでもある。それも、一回だけではなく何度でも演奏される可能性が高くなる。作曲家の真価は、作品が何年も何十年にもわたって演奏されることだ。その一歩が委嘱を受けることだ。

藤倉は、委嘱の多い作曲家である。ブルーリーズのために書いた作品もシカゴ交響楽団からの委嘱作品。現在抱えている案件は複数あり、三年先まで依頼が入っているという。今までに受けた委嘱の多くが、世界的な評価を受けているオーケストラやアンサンブルからのものである。



コンサート後、ブルーリーズと握手を交わす藤倉。©Todd Rosenberg

藤倉に世界の扉を開かせたのは、本人の才能はもちろんだが、作曲家で指揮者のペーター・エトヴェシュの力も大きかった。

ロンドンシンフォニーエッタが主宰する若手作曲家のためのプロジェクトに関わり、好きな音楽家につくことができることになった時、藤倉は迷わずペーター・エトヴェ

シュの名前を挙げた。駄目でもともとと挙げた名前だったが、OKの返事がきた。自分の作品の楽譜を送ってきなさい、と言われて楽譜と録音したものを送ったところ、しばらくすると世界のあちこちから反応が返ってきた。

ドイツのドナウエッシンゲン音楽祭からは委嘱話が舞い込んだ。「ペーター・エトヴェシュが、面白いから聴いてみる、というので聴いたのだが面白かった。一曲委嘱したい」

ベルリン芸術アカデミーからは「おめでとございます。ベルリンに四週間滞在して、電子スタジオ

演奏後にはステージに上がり、観客に挨拶する。





妻のミレナと。ブルガリア出身で元チェロ奏者の彼女は、トリニティ・カレッジの同窓生だ。今は写真を勉強している。

には調和がとれるように作られている。「聴くたびに違う。それが音楽の面白さで凄いです。だから何度でも聴いてほしいですね。現代音楽は難しい、聴きにくい、という人がいるけれど、モーツァルトだって、ベートーベンだって、

その時代にはそれが現代音楽だったわけです。それが、芸術的に優れていれば一〇〇年でも二〇〇年でも残っていく。僕は、歴史に名を残そうなんて思わないけれど、僕の作品が残ってくれば嬉しいですね」

ロンドン郊外の自宅には、六〇〇



作曲はいつもロンドン郊外の自宅で行う。今まで委嘱先の締め切りに遅れたことはない。「作品は自分の理想型。その中に身を置きたいと思う、居心地のいい世界なんです」(藤倉)

Cosmopolitans 212 Dai Fujikura

Talent, doesn't matter

才能なんて関係ない

で作品を作る賞があなたに授与されることになりました」との連絡がきた。

最初にコンタクトをとってから八カ月後、初めてエトヴェシユ本人に会えた。エトヴェシユは、送った楽譜全てに目を通してくれていて、一つ一つの作品について批評してくれた。高名な作曲家が、若い才能を大事に育てようとしてくれたことに、藤倉は感激する。

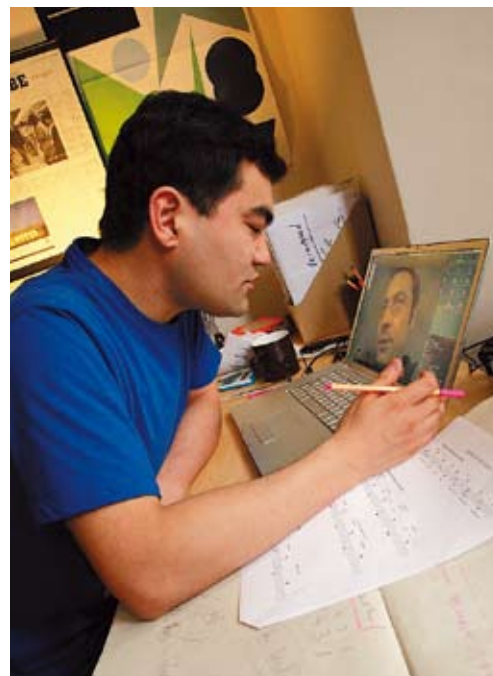
難解で抽象的といわれる現代音楽だが、藤倉の作曲方法は独特だ。彼がまず手に取るのはらくがき帳だ。B4サイズの白紙に、曲のイメージを描いていく。それは、イラストであったり、数式であったり、音符やリズムであったりする。全体的なイメージの中に、細部を構成する要素のアイデアを書き込んでいくのだ。

「僕の場合、ビジュアルから曲の構想を得ることが多いですね 例

えば、リコーダーのための作品は、砂丘に風が吹いて砂がさらさらと動いて縞模様を作っていく、そんなイメージを曲にしたいと思っています」

日本で初演された藤倉の作品『secret forest』は、藤倉の理想の森をイメージして書かれたものだ。ステージ上だけでなく、客席の中に楽器奏者を配して、木々のざわめきや鳥の鳴き声、木漏れ日、重なり合った葉を激しく叩く驟雨などが音楽で表現され、森に包まれているように感じさせる作品だ。

この作品の中で、藤倉はある仕掛けをしている。何小節かのブロックに1、2、3……と番号を振り、複数の演奏家がどの部分から演奏してもよい、というのだ。誰がどこを演奏するかは、その時になつてみないとわからない。どの部分をどの順番で演奏しても、音楽的



ドイツ在住のリコーダー奏者、イエレミアズ・シュヴァルツァーと、スカイプを通じて作曲のアイデアを話し合う。

本を超えるDVDを所有する、大の映画ファンだ。小学生の頃は映画音楽の作曲家になりたかったという。

今でも、その夢は胸のどこかにしまわれているのだろう。今後の抱負を聞くと、

「実は、オペラを書きたいんです。候補は三作あって、オリジナルのものが二つ、もう一つは小説から題材をとったもの。夢ですが、実現の可能性がなくもない夢です。僕の作品はストーリー性があるから、オペラで僕の音楽の世界を創りたいと思っています」

夢を現実に変えることができる。それが、藤倉の才能の最たるものなのかもしれない。才能についての本人の言葉でしめくろう。

「才能？ 関係ないです。それは外の人が判断すればいい。僕は作曲できればいい。書きたいことはまだまだ山ほどあるから、時間がほしい！」

(敬称略) A

平井英理子 Enko Hirai

ライター。一九五〇年生まれ。雑誌編集者を経て、フリーに。雑誌、PR誌を中心に、国内外のグルメや旅行取材、人物インタビューなどで活躍している。

萩原美寛 Yoshitomo Hayawana

写真家。一九五九年生まれ。写真家・菅洋志氏に師事し、その後独立。フォトルボラージュ、ポートレート、広告写真を中心に、雑誌やウェブなどで活躍している。